

る

ローマ人に説こうと 問うことに飛び回ーる

新約聖書の4つの福音書には、イエスの弟子たちがほんの少しのパンと魚を何千人もの群衆に分け与えると、群衆全員が満腹になり、しかも食べ終わった後にパンくずがカゴに何杯も集まるという不思議な話が出てくる。この話の真偽や解釈については、ここでは問わない。だが、人が数多く集まる場所、例えば企業という組織の中では、これとよく似た現象を見かけることがある。

「何か改善に役立つ提案を出してください」と工場長が言う。それを各班の班長が作業者に伝える。すると、数週間後には社員だけでなく、パートのおばさんも、臨時の工員も、作業員全員が立派な提案を出してくる。どの工場でも実施するので、各工場の改善提案を集めると何千件の規模になる。提案を出したからといって、それが直接本人の業績評価に反映されるわけではない。良い提案をしたり、数多く提案したりしても、せいぜい金一封や表彰状が出る程度である。つまり、基本的にボランティア活動なのである。これは、品質が良くなれば会社が発展し、会社が発展すれば自分たちの生活も良くなるという確信のベクトルが働いていた時代に起きた不思議な出来事である。なぜなら、トップから声がかかると、無の状態から数週間後には何千件もの提案が創出されるのだから。

「何か環境・社会貢献活動に関して提案を出してください」と事務局が記述式のアンケート用紙を配付すると、全国の社員から2,000件を超す提案が集まった。ある会社で、つい最近起きた現象である。提案者に対する報酬は用意されていない。つまり、この提案も基本的にボランティア活動なのである。しかし、この会社の社員には、組織を通じて環境に配慮し社会貢献につながる活動をしたいという自己実現のベクトルが強く働いていた。それが短期間で2,000件を超す提案を創出したのだらう。かつてのQC活動における不思議の再来である。

不思議を成就するには仕掛けが必要である。その仕掛けとは、日々の地道な布教活動によるベースづくりにほかならない。環境はかなり布教活動が進んでいるが、社会貢献はまだまだこれからの段階だ。ちょうど、ローマ人を説こうと飛び回っているパウロの段階かもしれない。布教を推進する側の人間にとっては悪戦苦闘の日々であるが、そうそう悪いことばかりではない。その活動の行き着く先で不思議に出会えるかもしれないのだから。